



YAMAGA

近代の山鹿を  
築いた人たち  
シリーズ

009

鹿本来民で育った放浪の歌人（二八八四〜一九四二）

宗 そう

不 ふ  
旱 かん

熊本に生まれ、鹿本来民で育った放浪の歌人。十年に及ぶ中国大陸放浪中に習得した技で硯を彫り、歌を詠んだ。

君が為われの作るとする墨の硯つくりをれば鳥のこゑごゑ  
貧困や妻子との別離に苦しみ、各地で放浪を続けながら生み出した不旱の短歌は、当時の流行に背を向けた万葉調の古風でおおらかなものであった。阿蘇で消息を絶つ。後に鞍岳の麓で発見された遺体が不旱のものであったろうと推定されている。

山鹿野の大野のすすきうちなびき  
光りかがやくわがゆくほとり





▲上 ふるさと来民の家

▲下 家族の写真。後列左から二人目が不早、その右が父嘉次郎。中列右から二人目が母寿江、その左が祖父嘉七。明治39年ごろ（ともに『宗不早全集』五月書房より）



▲鹿本支所前の歌碑「くちなしの実もて以る塗るふるさと乃来民乃団扇の春の日に干す」

## 幼年期

宗不早（そうふかん）は明治十七年（一八八四）、熊本市上通町で父嘉次郎、母寿江の長男として生まれました。本名は耕一、のちに耕一郎と名乗っています。号（ペンネーム）を不早と称し、硯工不早、不早研人ともいいました。家の職業は農蚕具商でした。小学校に上がるころ、父の生家である鹿本郡来民町（現在の山鹿市鹿本町）の祖父嘉七の家に預けられました。ずいぶん元気な性格で、両親の手におえないところがあったためだといいます。祖父の家は飴家（かざりや）という屋号の材木商で、かなりの広さの田畑をもっていました。不早はいたずらをした罰として、よく祖父に蔵の中に閉じ込められ、祖母に慰められていたようです。

：「耕一！ 耕一！ 何チウ事ツカナ、さぞ腹が減つたらう、ちよつとここに来なハリ。」蔵の中に閉じ込められた私を呼び寄せては細々とした心遣いの訓戒と慰めのうちにも、鮎や生菓子などを差し入れてくれた祖母！ 義理なればこそなおしものこと、私のために尽きせぬ苦勞があつたらしい…よく裏畑の隅の枇杷の樹にくくりつけられて、その上を叩かれた記憶がある。倉の中の監禁などめずらしくもない日常の出来事だった…

宗不早「その頃」『日本談義』昭和十四年七八月号より

来民小学校を卒業した不早は、山鹿の済済城城北分校（旧制鹿本中学校）に入學しました。途中から熊本市の実家に戻り、市内の済済本校に転入したのですが、卒業間際で退學となつてしまいます。卒業したのは長崎の中学校（鎮西学院）でした。

不旱は中学校を卒業後、福岡県八女郡大淵村（現黒木町）の小  
学校の代用教員となりました。これは一年足らずの短い期間でし  
たが、緑の山々に囲まれた自然の中で、らんぼうな自分を見つめ  
なおし、古典に親しむきっかけとなったようです。

筑後八女郡大淵村に小学教師たりし日の遠く

岩も谷もま葛しげらひ山水の

露けかりにしおもひ出にをり

明治三五年（一九〇二）四月、十九歳で熊本医学校に入学。本  
人の意思ではなく、父母のたつての願いに従ったものであったよ  
うです。医学の勉強よりも詩句に熱中し、作品を雑誌に投稿して  
何度か入選しています。

## 上京、歌作の開始

明治三七年、不旱は医学校を中退して勉学のためとして上京。  
湯島天神下の「伏竜館」に下宿します。ここで出会ったのが同じ  
下宿の窪田空穂でした。歌人・国文学者として、後に早稲田大学  
教授も務めた空穂は不旱より七歳年長で、すでに電報新聞（後の  
毎日新聞）歌壇の選者として活躍していました。不旱は窪田空穂  
の影響で、短歌熱にとりつかれることとなったのです。

このころの不旱は帰郷と上京を繰り返していました。明治四〇  
年四月、空穂門下の集まりである「十月会」の第一合同歌集『白  
露集』が刊行されます。歌集は謄写版刷りで、不旱はここに二二  
首の短歌を寄せています。

## 大陸放浪と帰国

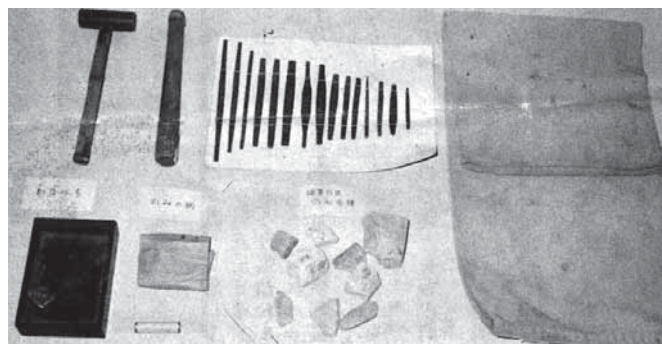
明治四五・大正元年（一九一二）、不旱は二九歳で朝鮮半島に  
渡ります。その理由はまったくの不明です。家庭や親戚関係で問  
題が生じたためとも言われています。朝鮮半島から中国大陸の北  
部（満州）に入り、各地を放浪した不旱は、ここで硯作りの技術  
を覚えたようです。

…ある城市を歩いていると硯師に出遭った。シナでは硯  
をほることを耕というので、自分の名は耕だから、これ  
は硯ほりになったらよいかもしれない。この思いつきか  
ら硯師のところで仕事を覚えた…

咲夫人の話『あけび』宗不旱追悼号 昭和二七年九月



▲不旱が作った硯（今田コレクション、熊本近代文学館蔵）



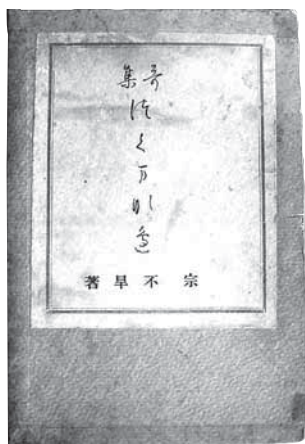
▲硯を作る道具（山鹿市立博物館企画展 不旱生誕99年展  
リーフレットより）



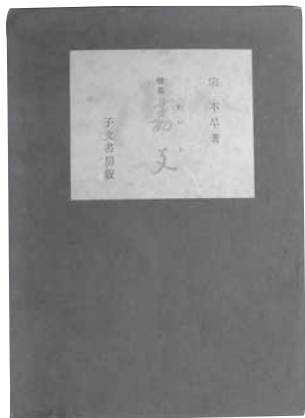
～不早の残した三冊の著作～



『柿本人麿歌集』大正 14 年  
(熊本県立図書館蔵)



『筑摩鍋』昭和 4 年 (個人蔵)



『荔支』昭和 16 年 (熊本県立図書館蔵)

春日作硯

今つくる硯の海は浅くあれど  
春は深しと梅の花ちる

つくりあげて洗ふ愛宕のすずり石  
さやけき面に春の日流る

庭上作硯

「甘沢不在早耕田秋雨足」と鑽りつけをれば久方の  
しぐれのあめの石をぬらしぬ

不早は自分の作った硯を道端で売りながら、放浪の旅の資金にしていたといいますが、それがどれほどの収入になったものかはわかりません。中国大陸から台湾に渡り、ここで一年余り暮らしたのち、不早はようやく帰国しました。大正十二年、(一九二三)、四〇歳になっていました。およそ十年間の放浪の間、不早から連絡がなかったため、不早は当時の歌壇から忘れられた存在となっていました。

帰国した不早は窪田空穂宅で九月一日に関東大震災に遭遇、そのまま空穂宅で年を越しています。空穂宅の庭先にムシロを敷き、硯を作っていたと言います。

震災の当日、空穂氏つとよりて末の子を抱く見つ  
天も地もあらぬおどろきするにさへ  
なほ人の親は子を抱きにけり

かつての歌仲間の人、松村英一のすすめで、同十三年二月から十二月にかけて、有名な雑誌『短歌雑誌』に短歌と歌人の評論を連載しています。

その連載で不早は「私は石工である。硯を鐫刻する石工、云わば職人である。石工の職人が現代歌人の歌を読んで感想をのべ得る道理がない」と言いつつ、多くの歌人について評論しました。太田水穂を皮切りに、窪田空穂、若山牧水、北原白秋、花田比露思などそのころの主要な歌人を取り上げていましたが、ほとんどの人に対して褒めることをせず、いわば悪口三昧でした。しかし、

これはただの悪口にとどまらず、中国放浪で得た詩書の知識や万葉集研究から得た深い造詣が背景にありました。大陸から帰国した不旱は、ほとんど無名の存在でしたから、当分の歌壇ではこの連載の作者が誰であるのかが話題になったといひます。

また、歌誌『あけび』主宰の花田比露思と知り合ひ、同誌に硯工不旱の名で作品を次々に発表しています。

同十四年には初めての著作として『柿本人麿歌集』を出版しました。このころ京都立命館大学の総長中川小十郎の知遇を得て、月一〇〇円（二〇〇円とも、二四〇円ともいわれている）の援助を受け、かねてから念願であった万葉集研究に本格的に取り組んでいます。

## 結婚、一時の平穩

大正十五年、不旱は四三歳で従姉妹の米村咲と結婚します。咲は二四歳でした。結婚は同郷の友人の仲立ちによるもので、咲夫人との間には四男三女を授かりました。このころの不旱は書画・骨董の行商にかかわり、郷里熊本と東京を往復する日々でした。

練馬にし住みて都のゆきかへり

花のさかりの前後をば見つ

でんでん太鼓

この夜らは楽しくをあらな泣くな子ら  
われに打たしめでんでん太鼓

子とをれば思ひ充たる取りて打つ  
太鼓でこてこ秋の夜らかも

ようやく一家を構え、不旱にも平穩が訪れたように思えたのですが、その日々は長くは続きませんでした。なぜかはわかりませんが、中川小十郎からの援助が二年で打ち切れ、収入を硯の売り上げに頼らなければならなくなったためです。家族の生活は貧困に苦しめられました。

昭和三年（一九二八）から、再び不旱の放浪の旅が始まります。各地の歌友を訪ね、硯を売り歩いたりしたといひます。熊本でも歌友らの世話で硯の頒布会が開催されました（並製品一面が十円、特製品が十五円だった）。このときの売上金で翌四年、硯の石を探すため再び台湾に渡っています。作歌活動も盛んで、たくさんの方の歌を発表しています。

### 台湾行

門司出帆

台湾の螺溪にころぶぬば玉の

石得まくほり海原わたる

石を拾う

石人また来たりしかと喚びかけて

礼ふかくする里人らはも

同じ年、長い間仲の悪かった父の嘉次郎を鹿本郡大道村（現山鹿市）藤井に訪ねます。実に十四年ぶりの対面でした。

### 故郷の元日

心もゆわれは息づきぬ山鹿野の  
朝野の鴉こゑのしるきに

## 親の涙

拾四年ぶりにて帰郷父に対面す

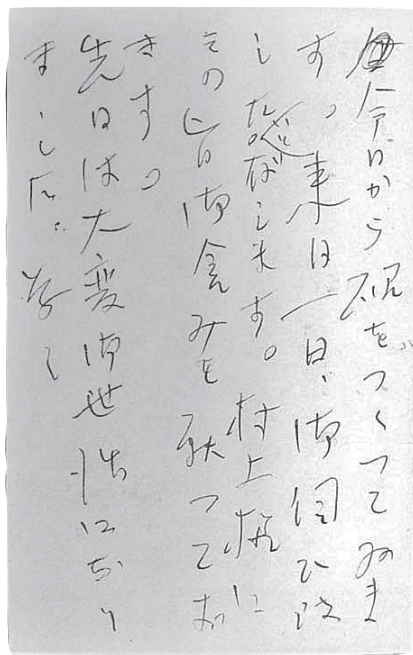
子を思ふ親の涙にあひぬべく

肥の国山鹿かへり来にけり

昭和七年、熊本県出身の今田哲夫（京都大学で中国文学を専攻）

と知り合います。今田は夫人とともに不旱を助け、不旱の歌集

『荔支』出版に際してはかなりの尽力をしています。



「今日から硯をつくっています…」  
今田哲夫あて葉書、大正14年  
(熊本近代文学館蔵)

この年から昭和十年にかけては上京、帰郷のほか、京都の今田家に逗留したり、佐渡・天草・長崎を訪れたりして、精力的に作歌活動に取り組んでいます。

## 家族離別、行方不明に

昭和十四年に六歳の長女浜路が病気のため死去してしまいます。十月には生後六ヶ月になったばかりの乳飲み子（次女由布子）を

抱いて帰郷し、来民（山鹿ともいわれる）の縁者に預け、不旱は熊本市の友人宅に居候しています。その由布子も早くに死んでしまいました。十六年には長男と四男が相次いで亡くなっています。四人の子供を次々に失った不旱は、精神的に大きな打撃を受けました。

## 夕闇

さきに浜路を喪ひ、また由布子をうしなふ。言はむ方なきさ  
びしさに

けふの日も午後五時ごろのをぐらさに  
ふるしぐれかも柊のはな

咲夫人とも離縁して、一家は離れ離れとなつてしまいます。

## 水鳥

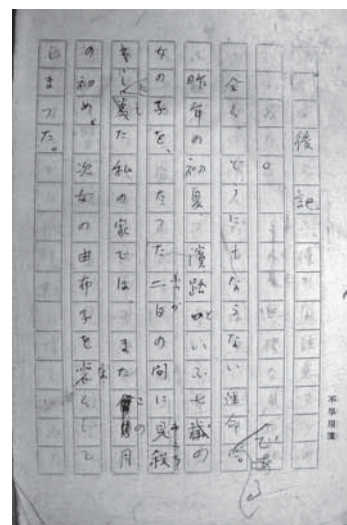
：子供一同をひきつれ、妻の去りける後よめる  
去るなどは我はいはぬに水鳥の  
あなあわただし立ち去りにけり

昭和十六年夏、最後の作品集となった歌集『荔支』が出版されます（荔支とはニガウリのこと）。歌集のあとがきには、子供を失ったつらい親の気持ちに綿々と記されています。

：この歌集の整理に私が着手したのは、由布子の死骸が二時間たたぬうちに一壺の灰となつて帰って来たその夜からのことであつたという次第を記し、この集を私の生きていた間のいささかな記念としたいのである。

『荔支』後記より





『荔支』後記 自筆原稿  
(熊本近代文学館蔵)

この年の秋から、不旱は芦北の専妙寺で過ごし、当時の住職が花田の「あけび」会員で、不旱と同じグループに属す

る縁があったためです。

翌十七年、不旱は突然専妙寺を出て、阿蘇の達磨屋旅館に宿泊。宿の主人に「来民へ行く」とだけ言って、ぶらりと宿を出て行ったといひます。何も持たずに、散歩にでも出かけるように。

不旱はそのまま行方不明になってしまいました。不旱の目指した来民は、祖父たちと幼少を過ごした地なのでした。

宿には不旱の書「内の牧朝闇いでて湯にかよふ道のべに聞く田蛙の声」「相对如夢床」が残されていました。これは不旱の絶筆となりました。

歌友のなかには不旱を案じ、菊池や阿蘇を探し尋ねたりした人もいたのですが、太平洋戦争の最中ということもあり、とうとう不旱の行方はわからないままになってしまいました。

## 不旱の評価

戦争が終わり、世の中が少し落ち着いて昭和二十三年、不旱を思う人たちによって、熊本市の水前寺公園の

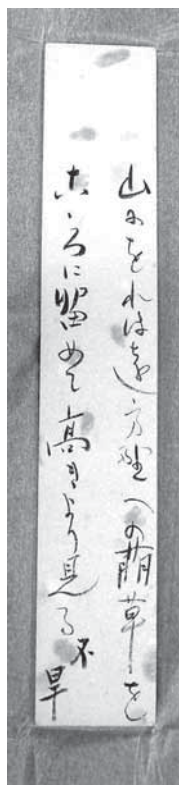


不旱終焉の地近くに建てられた歌碑  
(鞍岳の西麓、菊池市旭志)

一角に不旱の歌碑が建立されました。昭和三十七年には不旱の業績をしのんで作品などを集めた遺墨品展が盛大に開催され、新聞で報道されたことから、旭志（現在の菊池市）で不旱が行方不明になった昭和十七年当時に行き倒れ遺体が見つかったことがわかりました。後の昭和四〇年、当時の記録などを調査して、年齢や服装などから、おそらく旭志で発見されたこの遺体が不旱であつたらうと推定されました。現場近くには歌碑や記念碑が建てられています。

翌四一年、鹿本町役場（現在の鹿本総合支所）前、不旱が幼少期を過ごした家の近くにも歌碑が建てられました。県内には現在、五基の歌碑が建立されています。

硯を作りながら各地を放浪し、歌を詠み続けた不旱。その生活は、貧困と妻子との別れに苦しめられたものでした。しかし、残された歌は今でもその輝きを失わず、多くの人たちに愛されています。



山にをれば 遠方のへの萌草を  
こゝろに留めて高きより見る 不旱

自筆の短冊（熊本近代文学館蔵）

## 年表 History

|                  |                              |
|------------------|------------------------------|
| 明治十七年<br>(一八八四)  | 熊本市で生まれる                     |
| 明治二十四年<br>(一八九一) | 来民小学校入学                      |
| 明治三十四年<br>(一九〇一) | 中学卒業、一年間代用教員となる              |
| 明治三十五年<br>(一九〇二) | 熊本医学校に入学                     |
| 明治三十七年<br>(一九〇四) | 上京、下宿で窪田空穂を知り短歌の道へ           |
| 明治四十年<br>(一九〇七)  | 「十月会」の第一合同歌集『白露集』刊行、二三首掲載    |
| 明治四十三年<br>(一九一〇) | 「十月会」の第二合同歌集『黎明』刊行、三〇首掲載     |
| 明治四五年<br>(一九一二)  | 朝鮮半島から中国大陆へ渡り各地を放浪、作硯を覚える    |
| 大正十二年<br>(一九二三)  | 帰国。窪田空穂宅で関東大震災に遭遇            |
| 大正十三年<br>(一九二四)  | 『短歌雑誌』に「私の見た現代代表歌人」十一回連載     |
| 大正十四年<br>(一九二五)  | 初めての作品集『柿本人麿歌集』刊行            |
| 大正十五年<br>(一九二六)  | 従姉妹の米村咲と結婚                   |
| 昭和三年<br>(一九二八)   | 放浪の旅再開                       |
| 昭和四年<br>(一九二九)   | 再び台湾へ。第一歌集『筑摩鍋』刊行。父と十四年ぶりに再開 |
| 昭和七年<br>(一九三二)   | 京都大学の今田哲夫と知り合う               |
| 昭和十四年<br>(一九三九)  | 長女死去。九州新聞に入社し校正係となるも翌年退社     |
| 昭和十五年<br>(一九四〇)  | 夫人と離婚、家族別離。二女死去              |
| 昭和十六年<br>(一九四一)  | 第二歌集『荔支』出版。長男、四男死去           |
| 昭和十七年<br>(一九四二)  | 阿蘇で行方不明となる                   |
| 昭和二十三年<br>(一九四八) | 水前寺公園に最初の歌碑建立                |
| 昭和二十七年<br>(一九五二) | 没後十年。『あけび』九月増大号で追悼特集         |
| 昭和三十七年<br>(一九六二) | 遺墨遺品展開催                      |
| 昭和四十年<br>(一九六五)  | 死亡地点が推定される                   |
| 昭和四一年<br>(一九六六)  | 鹿本に第二歌碑建立                    |
| 昭和四十七年<br>(一九七二) | 没後三十年『日本談義』五月号で特集            |
| 昭和五三年<br>(一九七八)  | 旭志に第三歌碑建立                    |
| 昭和五八年<br>(一九八三)  | 山鹿市立博物館で「生誕九十九年展」開催          |
| 昭和六一年<br>(一九八六)  | 阿蘇に第四歌碑建立                    |
| 昭和六三年<br>(一九八八)  | 阿蘇に第五歌碑建立                    |

### 参考文献・ご協力頂いた方（敬称略）

荒木精之『宗不早の人間像』古川書房  
高木護編『宗不早全集』五月書房  
安永信一郎『宗不早』『ドキュメント日本人』6、学芸書林  
山鹿市立博物館『宗不早生誕九十九年展』展示リーフレット  
熊本県立図書館、熊本近代文学館、松本市立窪田空穂記念館

近代の山鹿を築いた人たち 009

鹿本来民で育った放浪の歌人 宗 不 早

平成21年3月発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課

〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田 2085(博物館内)

TEL 0968-43-1691

### 編集委員

大浦嘉之（稲田小学校） 飯田考行（社会体育課）  
宮崎 歩（文化課）

### 不 早 の 歌 碑

| 5       | 4                        | 3                                | 2                                 | 1                                    | 碑文                                | 場所                       | 建立                 |
|---------|--------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------------|--------------------------|--------------------|
| おはしけるかも | 隼鷹の宮居の神は数なかの<br>いしのかけにて  | 内之牧朝やみ出でて<br>湯に通ふ道のべに<br>聞く田蛙のこゑ | 山に居れば遠方野辺の<br>もえ草を心に留めて<br>高きより見る | くちなしの実もて色塗る<br>ふるさとの来民の団扇の<br>春の日に干す | ふるさとなお身を寄する<br>家ありて春辺を居れば<br>鶯の鳴く | 熊本市（水前<br>寺公園内出水<br>神社境） | 昭和二三<br>荒木精之<br>ほか |
| か（宮）    | 阿蘇市の石茶<br>屋隼鷹（はやた<br>か）宮 | 阿蘇市最後の<br>宿泊地、内牧温<br>泉の道智寺裏      | 菊池市旭志鞍<br>岳（遺体発見<br>現場近く）         | 山鹿市鹿本町<br>（幼少期の家<br>近く）              |                                   | 鹿本町                      | 昭和四一<br>鹿本町<br>不早会 |
| 郷土の会    | 昭和六三<br>自筆阿蘇             | 昭和六一<br>自筆阿蘇<br>郷土の会<br>（不早絶筆）   | 昭和五三<br>旭志村<br>不早顕彰会              |                                      |                                   |                          |                    |